# いわゆる「出典に左右される文体」を通して観た『今昔物語集』撰者の文体志向

## ――〝発病〟を表す動詞句「病ヲ受ク」「病付ク」の分布の偏りが意味するもの――

青木　毅

### 一、はじめに

『今昔物語集』の文体が、①出典に左右されている文体と、②出典に左右されない撰者自身の文体との二層から成り立っているということは、周知のところである。

①の出典に左右されている文体については、大坪併治博士・山田巌氏・堀田要治氏・峰岸明博士・桜井光昭氏・松尾拾氏・佐藤武義氏らの御研究により、巻二十を境として前半は漢文訓読調が強く後半は和文調が強いこと、本朝仏法部を中心として変体漢文の影響が見られることなどが明らかにされている。(1)

また、②の出典に左右されない撰者自身の文体については、山口佳紀博士・遠藤好英氏・山口仲美博士・舩城俊太郎氏らの御研究により、撰者自身の文体の存在が具体的に実証され、その内実が多かれ少なかれ変体漢文に関わる性格を有するものであることが明らかにされてきている。(2)

このように、『今昔物語集』の文体については、これまで諸氏によって様々な分析が加えられ、その成果も着実に挙がってきているのであるが、なお次のような問題点が残されているように思われる。

1、いわゆる「出典に左右される文体」の内実が明らかでないこと。

『今昔物語集』の文体が出典に左右される一面を有していること、とりわけ、巻二十を境として前半は漢文訓読調が強く後半は和文調が強いという事象については、もはや多くの言を費やす必要もなく、現在では、通説として一般に認められるところとなっている。また、そのように『今昔物語集』の文体が前半と後半とで漢文訓読調と和文調との交替を示す要因については、巻二十以前には漢文や変体漢文を出典とする説話が多く、巻二十二以後には仮名文や仮名交り文を出典とする説話が多いためであると考えられている。しかしながら、『今昔物語集』の文体が具体的にどのような形で出典に左右されているのか、換言すれば、出典の文体の影響がどのような形で『今昔物語集』に現れているのかといった点については、必ずしも明らかにされているわけではないのである。この問題が十分明らかにされないまま今日に至っているのは、従来の方法が、漢文訓読特有語・和文特有語といったあらかじめ性格の規定された語につい

て、『今昔物語集』内部における分布状況を調査するという、いささか表面的な統計処理に陥りがちであったことに起因しているものと思われる。とすれば、この問題を解明するためには、これまで、出典に左右されない『今昔物語集』撰者の文体の性格を明らかにする手段として採られてきた、出典文献との比較という方法[3]が、まず第一に適用されるべきであろうと思われる。

2、出典に左右される文体と出典に左右されない撰者自身の文体との関係が明確でないこと。

出典に左右される文体に関する研究と出典に左右されない撰者自身の文体に関する研究とは、これまで、それぞれ別個に進められてきた観があり、両文体がいかなる関係を有しているのかといった点については、ほとんど論じられることがなかったように思われる。その原因の一つには、出典に左右される文体というものが、あたかも『今昔物語集』撰者の文体ではないかの如くに考えられていたということが存するのではないかと思われる。しかしながら、『今昔物語集』におけるいわゆる「出典に左右される文体」というものは、必ずしも出典の文体がそのまま現れているといった性質のものではなく、あくまでも『今昔物語集』撰者の文体を通して生み出された結果であると考えられるのであるから、それは、言うまでもなく『今昔物語集』撰者の表現行為の所産と見做すことが可能であろうと思われる。『今昔物語集』撰者の文体の全貌を明らかにするためには、この出典に左右される文体と出典に左右されない文体との両面からアプローチして考察し、その考察結果を統一的に解釈してゆくことが必要となるであろうと思われる。

近年の『今昔物語集』の文体研究においては、出典に左右されない撰者自身の文体の内実が何如様であるかという問題に関心の中心があるように思われる。しかし、如上の問題もさることながら、出典に左右される文体についても、右に述べた如く、残された課題は今なお少なくないと思われるのである。

そこで、本稿においては、むしろこの「出典に左右される文体」の方に注目し、その内実を明らかにすることを目的として考察を行なうことにより、『今昔物語集』撰者の文体の性格を解明する糸口を模索したいと思う。

また、今回の考察においては、出典に左右された結果として『今昔物語集』内部における分布状況に著しい偏りの見られる、「病ヲ受ク」「病付ク」という〝発病〟を表す類義の動詞句二種を取り上げ、その分布の偏りの意味するところを明らかにするという方向で検討を加えることとする。ここで言う〝発病〟とは、〝病気にかかる〟こと、すなわち病気になったその時点のことを意味すると規定し、今回は、その〝発病〟を直接的に表現していると見られる右の二種類の動詞句に限り考察の対象とする。[4]

なお、本考察における対象について右のように細かな限定を加えるのは、本稿の目的が『今昔物語集』の文体の性格を追求するというところにあるため、文体を測る指標としては、できるだけ同義性を前提として扱い得る表現を取り上げることが有効であると思われたからである。[5]〝発病〟に関わる類義の語句が、相互にどのような意味上・位相上の関係を有しているのかといった問題については、また別途に検討を加える必要があろうと考えている。

## 二、『今昔物語集』における「病ヲ受ク」「病付ク」の使用状況

『今昔物語集』における「病ヲ受ク」と「病付ク」とが極めて類似した意味を担っているであろうことは、次に掲げる①～⑧の用例等により、容易に推察できようかと思われる。

①本ノ妻ヲバ居タリケル屋ニ居ヘテ、男ハ今ノ妻ノ許ニ居テ、惣テ本ノ妻ノ有リ无シヲモ不知リケレバ、本ノ妻思歎テ有ル程ニ、不思懸病付ニケリ。（改行）只有ツルソラ、打憑テ遙ニ来タル夫ハ去テ、物食ラム事モ不知バ、此様彼様ニ構ヘツツ過ケルニ、増テ重キ病ヲ受テケレバ、思ヒ遣ル方无ク、哀レニ心細ク思テ臥タルニ、京ヨリ付テ来タリケル女ノ童只一人ナム有ケル。（巻第二十四、第五十）

②此テ内大臣モ身ヲ弃テ公ニ仕リ給フ事无限シ。而ル間、大臣身ニ病ヲ受ケ給ヘリ。（巻第二十二、第一）

③其ノ所ニシテ身ニ病ヲ受テ悩ミ煩フ間、弥ヨ心ヲ至シテ法花経ヲ讀誦シテ、彼ノ夢ノ告ヲ信ズ。而ルニ、遂ニ病愈ル事无クシテ死ヌ。（巻第十三、第三十）

④其ノ所ニ籠居テ、静ニ法花経ヲ讀誦シ、三時ノ行法不断ズシテ勤メ行フ間、身ニ病付ヌ。薬ヲ以テ療治スト云ヘドモ、病愈ユル事无クシテ、弥ヨ増テ既ニ死ナムトス。（巻第十三、第廿九）

⑤而ル間、彼ノ大和ノ國ノ人ノ娘、形チ・有様美麗ナル由ヲ傳ヘ聞テ、消息ヲ遣テ、懇ニ假借シケレドモ、暫クハ不聞入ザリケリヲ強ニ云ハヾ、遂ニ父母此レヲ會セテ其ノ後、无限ク相思テ棲ケル程ニ、三年許有テ、此ノ夫不思懸ズ身ニ病ヲ受テ、日来煩ケル程ニ、遂ニ失ニケリ。（巻第二十七、第廿五）

⑥右近小将□ノ□ト云ケル人ノ、年若ク形チ美麗ニ心ヘ可咲カリケルヲ、聟ニ取テ、傅繚ケル事無限シ。姫君モ形チ・有様微妙カリケレバ、互ニ相思テ片時立離ル事モ无ク見ケル程ニ、姫君葬無ク病付テ、日来煩テ態ト心地大事ニ成ニケレバ、祈リ様々ニシテ父母歎ケレドモ、遂ニ失ニケレバ、戀悲ビケム事、只思ヒ可遣シ。（巻第三十、第六）

⑦為善ガ越中ノ守ニ成テ下ケル時ニ、惟規ハ當職ノ蔵人ニテ有ケレバ、否具シテモ不下ズシテ、叙爵シテ後ニゾ下ケルニ、惟規道ヨリ重キ病付タリケレドモ、然トテ道ニ可留キニ非ネバ、構テ下リ着ニケリ。（巻第三十一、第廿八）

⑧親の越中になりてくだりける時に、藏人にてえくだらで、かぶり賜はりて後に罷りけるに、道より病をうけていきつきければ、（『俊頼髄脳』、用例⑦の出典部分）

用例①は、「病ヲ受ク」と「病付ク」とが文脈上同一の内容を指示していると考えられる例である。この用例の場合、両者の差異として、「病付ク」の方が発病した時点のことを表し、「病ヲ受ク」の方が〝病気になった〟という事実を説明しているというように考える余地もあろうかと思われるが、用例②のように、「病ヲ受ク」の方にも発病した時点のことを表していると見られる例を見出すことができるのである。

用例③④は、道心深い比叡山の僧が日夜法花経を読誦することを怠らなかった善根によって死してなお法花経を誦するという極めて似た内容の説話中の、しかも同様の文脈において、「病ヲ受ク」と「病付ク」とが用いられている例である。

また、用例⑤⑥は、説話のストーリーとしては全く別の内容のものであるが、いずれも、見目麗しい男女が結婚をし相想いながら生活しているうちに片方が病気になって死んでしまうという同様の文脈において、「病ヲ受ク」または「病付ク」が用いられた例である。

このように、『今昔物語集』においては、同様の文脈中に用いられている「病ヲ受ク」と「病付ク」の用例が少なからず見出されるのである。

更に、用例中に点線にて示したように、「重キ病ヲ受ク／病付ク」「身ニ病ヲ受ク／病付ク」といった構文上の共通点が認められるのみならず、「不思懸ズ病ヲ受ク／病付ク」という言い方がなされていることによって知られるように、どちらも、〝突発的に病気にかかる〟という共通の意義特徴を有していると考えられるのである。

（表①）

| 巻＼句 | 病ヲ受ク | 病付ク |
|---|---|---|
| 1 | | |
| 2 | 5 | |
| 3 | 1 | |
| 4 | 4 | |
| 5 | 1 | (1) |
| 6 | 11 | |
| 7 | 10 | |
| 8 | | |
| 9 | 10 | |
| 10 | 6 | |
| 11 | 1 | |
| 12 | 5 | |
| 13 | 8 | 2 |
| 14 | 5 | 1 |
| 15 | 16 | |
| 16 | 4 | |
| 17 | 13 | 1 |
| 18 | | |
| 19 | 5 | |
| 20 | 7 | 1 |
| 小計 | 112 | 6 |
| 21 | | |
| 22 | 1 | |
| 23 | | |
| 24 | 3 | 4 |
| 25 | | 1 |
| 26 | 2 | |
| 27 | 2 | 2 |
| 28 | | 1 |
| 29 | | 2 |
| 30 | | 2 |
| 31 | 1 | 4 |
| 小計 | 9 | 16 |
| 合計 | 121 | 22 |

（注記）巻五の「病付ク」の欄に示した一例とは、「付キタル病ハ不失ヌ物也」というものである。

この表によると、「病ヲ受ク」は、前半に集中して現れており、後半になると急激に減少しているのに対して、「病付ク」は、前半ではいくつかの巻に一～二例が見られる程度であるが、後半になると次第に増加する傾向が認められる。

このような分布状況は、これまでたびたび指摘されてきたような、漢文訓読語・和文語という文体上二形対立の関係にあるとされる用語の分布状況と極めて似ていることに気付かれようかと思われる。その一例としては、例えば、漢文訓読語「甚ダ」と和文語「糸」の分布状況（次頁の表②）などを挙げることができる。[6]

この表②のような『今昔物語集』における用語の分布の偏りが、出典に左右された結果であるとする従来の考え方によると、表①に見られた「病ヲ受ク」と「病付ク」の分布の偏りについても亦、出典に左右された結果を示しているのではないかと予想されよう。

ただし、この「出典に左右される」という言い方については、従来、出典の表現に影響されることを意味するのか、出典の文体に影響されることを意味するのかといったところが、必ずしも明確ではなかったように思われる。

そこで、まずは、出典文献との比較を行なうことによって、「病

右のことから、『今昔物語集』における「病ヲ受ク」と「病付ク」とは、極めて類似した意味を担っていると考えられるように思われる。このことは、また、用例⑦⑧のように、『今昔物語集』における「病付ク」に対応する出典文献の当該箇所が「病をうく」となっている例の存することからも、裏付けることが可能であろう。

さて、このような「病ヲ受ク」と「病付ク」とについて『今昔物語集』における巻別分布を調査すると、次掲の表①のようになる。

（表②）

| 語／巻 | 甚ダ | 糸 |
|---|---|---|
| 1 | 4 | 1 |
| 2 | 〔5〕2 | |
| 3 | 3 | 4 |
| 4 | 4 | 3 |
| 5 | 1 | 11 |
| 6 | 9 | 2 |
| 7 | 16 | |
| 8 | | |
| 9 | 15 | |
| 10 | 1 | 5 |
| 11 | 2 | 4 |
| 12 | 2 | 6 |
| 13 | 2 | |
| 14 | 3 | 2 |
| 15 | 1 | 2 |
| 16 | 2 | 25 |
| 17 | 5 | 〔7〕1 |
| 18 | | |
| 19 | 1 | 37 |
| 20 | 3 | 13 |
| 21 | | |
| 22 | | 3 |
| 23 | 2 | 8 |
| 24 | | 20 |
| 25 | | 4 |
| 26 | | 48 |
| 27 | | 34 |
| 28 | | 46 |
| 29 | | 40 |
| 30 | | 38 |
| 31 | | 23 |

（注記）「糸惜シ」の用例は除外してある。

ヲ受ク」と「病付ク」とが出典の表現を踏襲したものであるのか否かといった点を明らかにしておきたいと思う。

## 三、出典文献との比較

ここで、『今昔物語集』の出典または出典に準ずるものと判断して取り上げる文献は、次掲の二十文献である。以下、『今昔物語集』の「出典」または「出典文献」と言えば、特に断らない限り、その二十文献を指すこととする。

注好選（東寺観智院本）・三宝感応要略録（大蔵経）・冥報記（前田本）・大唐大慈恩寺三蔵法師伝（興福寺本）・弘賛法華伝（大蔵経）・孝子伝（船橋本）・日本霊異記（日本古典文学大系）・法華験記（日本思想大系）・日本往生極楽記（天理本）・江談抄（江談抄研究会編『古本系江談抄注解』昭53、武蔵野書院）・将門記（真福寺本）・三宝絵詞（前田本）・俊頼髄脳（日本歌学大系）・伊勢物語（日本古典文学大系）・古今和歌集・後拾遺和歌集・道信集・元輔集（以上新編国歌大観）・宇治拾遺物語（桜井光昭『三本対照宇治拾遺物語』平成元、武蔵野書院）・古本説話集（梅沢本）

なお、ここで言う「出典に準ずるもの」とは、同文性の強い同話のことであり、具体的には、『宇治拾遺物語』や『古本説話集』に含まれている一部の説話を指す。それらは、『今昔物語集』に見られる同文性の説話と共通の母胎から発したと考えられているものであり、その共通母胎となった文献は、『宇治拾遺物語』や『古本説話集』のように和文で書かれたものであろうと言われてきている。すなわち、『宇治拾遺物語』や『古本説話集』は、母胎の和文体を継承していると見られるのであり、その意味で、これらを「出典に準ずるもの」として取り上げることは許されようかと思う。

さて、『今昔物語集』には、「病ヲ受ク」が一二一例「病付ク」が二二例見出されるが、そのうち、出典の判明している説話には、「病ヲ受ク」が七〇例「病付ク」が四例認められる。それらについて出典文献との比較を行なってみると、次のような型に分類・整理することが可能となる。

(1)出典文献に当該表現が見出される場合

例えば、

⑨顕慶二年ト云フ年、身ニ重病ヲ受テ、辛苦悩乱シテ既四十餘日ヲ経タリ、遂悶絶シテ死ヌ。（『今昔物語集』巻第六、第廿四）

⑩顯慶二年。受重病經四十餘日。昏亂悶絶而死。（『三宝感応要略録』巻上、第二十六）

⑪年七ツ八ツ許有ケル男子ノ形チ殿カリケレバ、極ク悲ク愛シ思ケルガ、日来煩テ墓无クシテ失セニケレバ、貫之、无限リ此ヲ歎キ泣キ迷テ、病付許思焦ケル程ニ、月来ニ成ニケレバ、任ハ畢ヌ。（『今昔物語集』巻第二十四、第四十三）

⑫七八ばかりの子の、えもいはずおかしげなるを、かぎりなくかなしうしけるが、とかくわづらひて、失にければ、泣まどひて、やまひづく（ママ）ばかり思ひこがるゝ程に、月ごろになりぬれば、（『宇治拾遺物語』一二―一三）

の如く、出典文献に存する表現（「受重病」「やまひつく」）を『今昔』撰者がそのまま取り入れたと見られる場合である。

(2)出典文献に当該表現が見出されない場合

ⓐ別の表現が対応する

例えば、

⑬而ル間、嶋下ノ郡ノ味木ノ里至テ、忽チ身ニ病ヲ受タリ。（『今昔物語集』巻第二十、第卅八）

⑭終到嶋下郡味木里　忽得病（『日本霊異記』巻上、第二十七）

⑮為善ガ越中ノ守ニ成テ下ケル時ニ惟規ハ、當職ノ蔵人ニテ有ケレバ、否具シテモ不下ズシテ、叙爵シテ後ニソ下ケルニ、惟規道ヨリ重キ病付タリケレドモ、然トテ道ニ可留キニ非ネバ、構テ下リ着ニケリ。（『今昔物語集』巻第三十一、第廿八）

⑯親の越中になりてくだりける時に、藏人にてえくだらで、かぶり賜はりて後に罷りけるに、道より病をうけていきつきければ、（『俊頼髄脳』二一四頁）

の如く、出典文献に存する表現（「得病」「病をうけ」）を『今昔』撰者が「病ヲ受ク」または「病付ク」に改めたと見られる場合である。

ⓑ対応する表現が存しない

例えば、

⑰其後、智光、身ニ病ヲ受テ死ヌ。房□□□不ザル間、十日ヲ経テ蘇ヌ、弟子等ニ語テ云ク、（『今昔物語集』巻第十一、第二）

⑱智光▼忽死．依遺言．不暫葬（シハラク）．十日得蘇（コト）．告弟子等．云．（『日本往生極楽記』二）

の如く、出典文献にない「病ヲ受ク」（「病付ク」については⑯の場合は見られない）を『今昔』撰者が付け加えたと見られる場合である（▼印は該当する表現が存すべき箇所を示している）。

ⓒ対応する表現が存すべき文脈が存しない

例えば、

⑲亦、其寺ノ邊ニ老タル嫗有ケリ、極メテ貧クシテ二人ノ男子（ママ）ケリ。共ニ出家シテ僧ト成レリ、比叡ノ山ノ僧也。兄ヲバ禪静ト云フ、弟ヲバ延叡ト云ヒ。（改行）而ルニ、其、寡ニシテ身ニ重キ病ヲ受タリ、日来、悩ミ煩ヒテ遂ニ死ヌ。（『今昔物語集』巻第十五、第廿一）

⑳寺邊有一貧女．而寄居矣．有兩男子．爲天台僧．兄曰禪靜．弟曰延叡．其母●卽世．（『日本往生極楽記』二一）

の如く、出典文献にない「病ヲ受ク」を含む文脈（「病付ク」については⑯の場合は見られない）を『今昔』撰者が書き加えたと見られる場合である（●印は該当する文脈が存すべき箇所を示している）。

以上のような分類に従って出典文献との関係をまとめると、次掲

の表③の如くなる。

（表③）

| 類別 | 病ヵ受ク | | | | 病付ク | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | (1)出典ニアリ | (2)出典ニナシ | | | (1)出典ニアリ | (2)出典ニナシ | | |
| 出典文献 | | ⓐ | ⓑ | ⓒ | | ⓐ | ⓑ | ⓒ |
| 三宝感応要略録 | 1 | 10 | | 2 | | | | |
| 冥報記 | | 14 | 1 | | | | | |
| 弘賛法華伝 | | 1 | | | | | | |
| 日本霊異記 | | 7 | 3 | 1 | | | | |
| 法華験記 | 10 | 5 | 1 | 2 | | 2 | | |
| 日本往生極楽記 | | 8 | 2 | 1 | | | | |
| 俊頼髄脳 | | | | | | 1 | | |
| 宇治拾遺物語 | | | | | 1 | | | |
| 合計 | 11 | 46 | 7 | 6 | 1 | 3 | | |

（注記）「病ヵ受ク」の「(1)出典ニアリ」の欄における『法華験記』の一〇例中には、出典文献（『法華験記』）において、「ウク」を表記する漢字が「請」字となっているものや、「受ク」に対応する部分が「受取（ウケトル）」となっているものが含まれている。仮に、それらを「病ヵ受ク」とは一致しない例として見るならば、(1)に該当するもの（字種や表現の構成要素が完全に一致しているもの）は、わずか五例となる。[9]

この表によれば、出典文献に存する表現を『今昔』撰者がそのまま取り入れたと見られるものは、「病ヵ受ク」が七〇例中一一例（15.7%）、「病付ク」が四例中一例（25.0%）であって、意外に少ないことが知られる。

二で述べたように、「病ヵ受ク」は巻二十以前に集中して現れ、「病付ク」は巻二十二以後に集中して現れているのであって、その分布の偏りは、出典に左右された結果を示しているのではないかと予想された。ところが、表③より知られる限りでは、出典の表現に影響されてそれを踏襲したと見られるものはさほど多くはなく、むしろ、『今昔』撰者が独自に用いていると見られるものの方がより多くなっているのである。

しかも、出典文献に存する表現を『今昔』撰者が「病ヵ受ク」または「病付ク」に改めたと見られる(2)のⓐの場合が最も優勢となっているのであって、そこには、「病ヵ受ク」「病付ク」の使用に関する『今昔』撰者の積極的な表現行為といったものを伺うことができるのではないかと思われる（ただし、「病付ク」に関しては、出典判明話における用例数が極めて少ないため、その解釈には慎重を要する）。

以上のことから考えると、二の表①に見られた「病ヵ受ク」と「病付ク」との分布の偏りは、出典に左右された結果を示していると一応は予想されたものの、単純に出典の表現を『今昔』撰者がそのまま踏襲した結果を反映しているとは、必ずしも言い難いように思われる。

## 四、平安時代における「ヤマヒヲウク（受病）」「ヤマヒツク（病付）」の位相的考察

三での検討により、『今昔物語集』における「病ヲ受ク」「病付ク」の使用については、出典の表現が与えた影響は意外に小さく、むしろ、『今昔』撰者の積極的な表現行為にかかるところが大きいのではないかと考えられた。

それでは、いかなる理由によって、「病ヲ受ク」と「病付ク」との分布が前半と後半とで交替する状況を示しているのであろうか。次に考えられることは、前半は漢文訓読調が強く後半は和文調が強いとされる『今昔物語集』の文体との関わりであろう。

そこで、本項では、「ヤマヒヲウク（受病）」と「ヤマヒツク（病付）」とがどのような位相（文体）的性格を有しているのかという点について、検討を加えてみたいと思う。

〔一〕国語文における検討

ここでは、まず、国語文における使用状況を調査することとする。その資料としては、平仮名で書かれた和文の代表として、物語・日記・随筆などの仮名文学作品[10]を取り上げ、また、漢字のみで書かれた和化漢文の代表として、公卿日記を中心とする古記録[11]を取り上げることとする。

それぞれの文章ジャンルにおける「ヤマヒヲウク」「ヤマヒツク」の具体例とその出現状況は、以下の通りである。

1、和文（仮名文学作品）

「ヤマヒヲウク」

㉑「御いきざしなどいとくるしげなるを、いとふびんなるわざかなとおもひしに、風の御簾をふきあげたりしはざまよりみいれしかば、さばかりおもきやまひをうけとりたまひてければ、いかてかは御いろもたがひて、きらゝかにおはする人ともおぼえいいず、ことのほかに不覚になり給にけりと見えながら、ながかるべきことゞものたまひしなん、あはれなりし」とこそ、のちにかたりたまひけれ。（『大鏡』第四巻「右大臣道兼」、小野宮右大臣実資の詞）

「ヤマヒツク」

㉒そのかへりごとに、「いとうれしうとひたまへること。あさましうかゝる病もつくものになむありける」とて、（『大和物語』百七十、詞）

㉓その罪に、恐しき病ツきて、ほとほと敷いますかり。（『宇津保物語』「藤原の君」、地）

㉔古權大納言の君よとともにものをおもひつゝやまひつきはかなくなりたまひにしありさまをきこえいてゝなくことかきりなし（『源氏物語』「はし姫」、地）

㉕姫君もたゞめでたく、うつくしき人の見まほしく戀しかりつるにやまひもつくにこそありけれ、（『浜松中納言物語』巻一、地）

㉖「物思ひに病のつきて、亡くなりぬる」となん、うけたまはる（『狭衣物語』巻三、詞）

㉗中宮の若宮、今宮、さし續きて月日の如くにて光り出で給へるに、すべてずちなう、「今はかうにこそ」とおぼしつるに御病もつき、御命も縮めてけるにや。（『栄花物語』巻第八「はつはな」、地）

㉘いまのみかど・春宮さしつゞきてむまれさせ給にしかば、よをおぼしくづをれて、月ごろ御やまひもつかせたまて、寛弘七年正月廿九日、うせさせ給にしぞかし。（『大鏡』第四巻「内大臣

道隆」、詞）

㉙かたみにとゞまりたまへる姫君に、ひき別れむ事もかなしく、おぼしわづらひしほどに、その大臣も、かなしみに病づき、いのちたへずしてなくなりにければ、（『とりかへばや物語』上、地）

2、和化漢文（古記録）

「ヤマヒヲウク」

㉚于時外記安近持來御馬六十疋解文、進于上卿之次申云、牧監多治基固路中受病、仍着進身代同姓正兼云々、（『九暦』天慶元年九月七日）

㉛勝算僧都今曉自宮退出、御修法結願了退出、受病罷出云々、（『小右記』長保元年十月五日）

㉜此間疾疫盛發、病死不絶、遣召之使同受此病、被召之者又以卒去、（『権記』長徳四年十一月十九日）

㉝大僧都永昭去夕死去、受病之後至于第七日有此災云々、（『左経記』長元三年三月廿二日）

㉞聞前美乃守知房朝臣巳時許卒去、（中略）心性甚直、頗有文章、受病之後纔經六箇日也（『中右記』天永三年二月十八日）

㉟去夜半許宇治平等院並法成寺修理別當法橋成信死去云々、此兩三年有病氣上、此受重病云々、（『殿暦』永久五年十一月十一日）

「ヤマヒツク」

㊱々今任權大納言、而從去永久四年十月飲水病付、此夏背灸治、（『中右記』保安元年七月廿二日）

㊲從去春比痔病付天、近日更發、常惡出來、不能出仕候、（同右、大治四年六月六日）

㊳左京少進中原則光申云、乘馬俄病付、借他馬之間頗以遲參也、（同右、大治五年四月十二日）

（表④）和文における出現状況

| 文献名 | ヤマヒヲウク | ヤマヒツク |
|---|---|---|
| 竹取物語 | | |
| 伊勢物語 | | |
| 土左日記 | | |
| 大和物語 | | 1 |
| 平中物語 | | |
| 多武峯少将物語 | | |
| 蜻蛉日記 | | |
| 宇津保物語 | | 4 |
| 落窪物語 | | |
| 枕草子 | | |
| 源氏物語 | | 5 |
| 和泉式部日記 | | |
| 紫式部日記 | | |
| 夜の寝覚 | | |
| 更級日記 | | |

10C　11

(表⑤) 和化漢文における出現状況

| 文献名 | ヤマヒヲウク | ヤマヒツク |
|---|---|---|
| 貞信公記 | | |
| 九暦 | 1 | |
| 小右記 | 7 | |
| 権記 | 4 | |
| 御堂関白記 | | |
| 左経記 | 3 | |
| 春記 | | |
| 浜松中納言物語 | | 1 |
| 篁物語 | | |
| 狭衣物語 | | 1 |
| 讃岐典侍日記 | | |
| 栄花物語 | | 2 |
| 大鏡 | 1 | 7 |
| 堤中納言物語 | | |
| とりかへばや物語 | | 1 |
| 合計 | 1 | 22 |
| 水左記 | | |
| 帥記 | | |
| 後二条師通記 | | |
| 長秋記 | | |
| 中右記 | 7 | 3 |
| 殿暦 | 2 | |
| 永昌記 | | |
| 合計 | 24 | 3 |

右の表④・表⑤を参看して容易に気付かれることは、和文における出現状況と和化漢文における出現状況とが全く逆の様相を示しているということである。すなわち、和文においては、「ヤマヒヲウク」は、『大鏡』に一例が見出されるのみであり、しかもそれが小野宮右大臣実資の会話文中に存するという位相上の制約が認められるのに対して、「ヤマヒツク」は、用例数こそ必ずしも多いとは言い難いものの、特定の文献に偏在する傾向もなく、比較的広い範囲の文献に見出されるのである。一方の和化漢文においては、和文の場合とは逆に、「ヤマヒヲウク」は、比較的広い範囲の文献に見出されるのに対して、「ヤマヒツク」は、院政期に成立した『中右記』に数例が見られるのみといった状況となっているのである。

右のような出現状況のみから、直ちに「ヤマヒヲウク」と「ヤマヒツク」の位相（文体）的性格を認定することは、いささか困難であろうかと思われるが、少なくとも、「ヤマヒヲウク」の方は漢文

の表現との関わりが濃厚であり、一方の「ヤマヒツク」はそれとの関わりが希薄であろうことが、容易に想像できようかと思われる。峰岸明博士は、その著書『平安時代古記録の国語学的研究』（昭61、東京大学出版会）の中で、「受病（ヤマヒヲウク）」の「受（ウク）」という動詞について、「その動詞自體が漢文訓讀語というわけではないが、その用法は、元來漢文の訓讀と關わるものであろう。」（五二八頁）と述べておられる。

そこで、次に、漢文（乃至漢文訓読文）において「ヤマヒヲウク」や「ヤマヒツク」が見出されるか否かを検討してみることとする。

〔二〕漢文（乃至漢文訓読文）における検討

まず、次に掲げた平安時代の訓点資料[12]を調査してみたところ、「ヤマヒヲウク（受病）」「ヤマヒツク（病付）」共にその使用例を見出すことができなかった。

小川本願経四分律平安極初期点・西大寺本金光明最勝王経平安初期点・知恩院蔵大唐三蔵玄奘法師表啓平安初期点・東大寺図書館蔵地蔵十輪経元慶七年点・正倉院聖語蔵地蔵十輪経元慶七年点・石山寺本妙法蓮華経玄賛淳祐古点・正倉院聖語蔵弁中辺論天暦八年点・石山寺蔵佛説太子須陀拏経平安中期点・石山寺蔵沙弥十戒威儀経平安中期角筆点・石山寺蔵法華経義疏長保四年点・西大寺蔵護摩密記長元八年点・西大寺本不空羂索神呪心経寛徳二年点・知恩院蔵地蔵十輪経康平三年点・天理大学図書館・国立京都博物館蔵南海寄帰内法伝平安後期点・兜木正亨師蔵無量義経平安後期点・龍光院蔵妙法蓮華経平安後期点・高山寺蔵大毗盧遮那成仏経疏永保二・長治元年点・宮内庁書陵部蔵管見記紙背文選院政期点・興福寺本大慈恩寺三蔵法師伝承徳三・永久四年点・前田本冥報記長治二年点・神田本白氏文集天永四年点・広島大学蔵八字文殊儀軌永暦二年点・石山寺蔵大唐西域記長寛元年点

右の訓点資料における〝発病〟を表す表現としては、次掲の用例の如く、「ヤマヒニアフ（遭病）」「ヤマヒヲウ（得病）」「ヤマヒニカカル（嬰病）」といった動詞句が指摘されるのである。

「ヤマヒニアフ」

㊴若（し）忽（タチマチ）に寒熱等の病に遭（ア）フて或は一日を経（ヘ）、或（は）二日を経　或は復　乃至〔於〕七日を経む（西大寺本『不空羂索神呪心経』寛徳二年点、65）

「ヤマヒヲウ」

㊵彼床に敷（く）もの无（く）して病を得ッ。（小川本『願経四分律』平安極初期点、乙巻・③13）

「ヤマヒニカカル」

㊶船の師、身も重病に嬰（カ）、四（リ）體御不（ヲサメズ）、（兜木正亨師蔵『無量義経』平安後期点、362）

さて、〔一〕に掲げた表④・表⑤の出現状況から推察されるように、「ヤマヒツク」は、和文において用いられる表現であったと考えられるから、漢文訓読文に見出されないことも強ち偶然ではないように思われる。

それでは、「ヤマヒヲウク」についてはどのように考えることができるのであろうか。平安時代の漢文訓読文は、もとより右に掲げたものがすべてではないのであって、今回調査した訓点資料には適々見出されなかったということも当然考えられる。

そこで、次の手続きとしては、中国の漢文自体に「ヤマヒヲウク」と訓読し得るところの「受病」という字面が見出されるか否かを調

査することが必要であろうと思われる。

『佩文韻府』を始め、種々の引得・索引類を利用して用例を検索したところ、「受病」という字面は、次掲の如く、『周礼』『文選』『白氏文集』[13]といった文献に見出すことができた。

㊷斷目不荼則及其大脩也筋代之受病夫目也者必强强者在内而摩其筋夫筋之所由幹恒由此作（『周礼』巻四十二、考工記・弓人）

㊸斷摯不中膠之不均則及其大脩也角代之受病夫懷膠於内而摩其角夫角之所由挫恒由此作（『周礼』巻四十二、考工記・弓人）

㊹是由栢侯抱將死之疾而怒扁鵲之先見以覺痛之日爲受病之始也（『文選』巻第五十三、論三、養生論、嵇叔夜）

㊺一年十二月。毎月有常令。君出臣奉行。謂之握金鏡。由玆六氣順。以遂萬物性。時令一反常。生靈受其病。周漢德下衰。王風始不競。又從斬晁錯。諸侯益強盛。（『白氏文集』巻第二、贈友詩五首）

用例数としてはけっして多いとは言えないが、いずれの文献も我が国へ及ぼした影響が小さくないことは、注意して良いかと思われる。

例えば、今回の調査で「受病」の用例が見出された文献は、いずれも『日本国見在書目録』[14]にその名が見られ、遅くとも九世紀には我が国に既に伝えられていたことが知られる。

㊻周礼疏五十巻（唐賈公彦撰）（四、礼家）

㊼●白氏文集七十（新四ノ一四オ）（卅九、別集家）

㊽●文選三十（旧下ノ廿九オ）（昭明太子撰）。文選六十巻（旧下ノ二八オ新四ノ二ウ）（李善注）（冊、惣集家）

また、『周礼』と『文選』とについては、

㊾凡應二講説一者。禮記。左傳各限二七百七十日一。周禮。儀禮。毛詩。律各四百八十日。周易三百一十日。尚書。論語。令各二百日。孝經六十日。三史。文選各准二大經一。公羊穀梁。孫子。五曹。九章。六章。綴術各准二小經一。三開。重差。周髀共准二小經一。海嶋。九司亦共准二小經一。（『延喜式』巻二十、大学寮、講書）

の如く、大学寮において講読さるべき書籍として『延喜式』[15]にその名が記されており、更に、『白氏文集』と『文選』とについては、能因本『枕草子』[16]第百九十三段に、

㊿文は文集文選はかせの中文（能因本『枕草子』第百九十三段）

といった記述が見られるのである。

こういった状況から推察すると、「受病」という字面が『周礼』『文選』『白氏文集』といった文献を通じて我が国へ伝えられたという可能性も、十分考えられるように思われる。

この「受病」という字面は、また、日本人が作製した漢文を収める久遠寺蔵『本朝文粋』[17]にも次のように見出され、しかも、そこでは、実際に「ヤマヒヲウク」と訓読されているのである。

(51)過度則心—腹必受其病（スクントニ／ク／ヲ／ミセケナ）（久遠寺蔵『本朝文粋』巻第四、辭太政大臣第三表、後江相公）

(52)而今月三日・忽受重—病（ニ／ク／ヲ）。（同右、巻第五、請特蒙天恩被恤給度者四人状、大江朝綱）

(53)受（テ）二大—病一身不レ從（テニ）レ例。（同右、巻第七、返納、江匡衡）

(54)夏—季。受（スエニウケテ／ヲ）レ病秋—初（メニソムク／ヲ）。背（ヲ）レ世。（同右、巻第十四、爲亡息澄明四十九日願文、後江相公）

(55)右員外納言受（シ／ヲ）レ病之時變二風儀一而脱（レ／ヲ）二俗累一。（同右、巻第十四、在原氏爲亡息員外納言四十九日修諷誦文、後江相公）

久遠寺蔵『本朝文粋』は、文章ジャンルとしては〈日本漢詩文〉に属する資料とされ、この〈日本漢詩文〉の文体は、一般には概ね正格漢文と見做されているものである。[18] したがって、久遠寺蔵『本朝文粋』に見られる「受病」は、先に掲げたような中国漢文の「受病」に由来するものであると考えて、恐らく間違いはあるまいと思われる。その「受病」が「ヤマヒヲウク」と訓読されているということは、それ以前に、漢文訓読の場においても同様の訓読がなされていたであろうことを示唆していると考えられよう。

以上〔一〕〔二〕での検討結果を総合すれば、「ヤマヒヲウク」は、漢文の訓読によって生じたいわゆる漢文訓読語に属する表現であると推定されるのであり、和文においてほとんど見出されなかったことも首肯されようかと思われる。

一方の「ヤマヒツク」については、今回の調査において漢文（乃至漢文訓読文）にその用例（字面）が認められなかったこと、和化漢文である古記録に通常見出し難いこと、和文である仮名文学作品に比較的広く認められることなどから、いわゆる和文語に属する表現であると考えて大過はあるまいと思われる。

## 五、『今昔物語集』における「病ヲ受ク」「病付ク」の分布の偏りが意味するもの

ここで、これまで検討してきたところをまとめると、次の如くなろう。

1、『今昔物語集』における「病ヲ受ク」「病付ク」は、共に〝突発的に病気にかかる〟という意義特徴を有していると認められ、極めて類似した意味を担っていると考えられる。

2、『今昔物語集』においては、「病ヲ受ク」は漢文訓読調の強い巻二十以前に集中して分布し、「病付ク」は和文調の強い巻二十二以後に集中して分布するという、顕著な傾向性が認められる。

3、『今昔物語集』における「病ヲ受ク」「病付ク」は、いずれも、単純に出典の表現（字句）を踏襲したとは言い難いものであり、むしろ、その使用は『今昔』撰者の積極的な表現行為にかかるところが大きいと推定される。

4、「ヤマヒヲウク」は、いわゆる漢文訓読語に属する表現であると考えられるのに対し、「ヤマヒツク」は、いわゆる和文語に属する表現であると考えられる。

右の検討結果を総合すれば、二の表①に見られた『今昔物語集』における「病ヲ受ク」「病付ク」の分布の偏りは、出典の表現（字句）に影響されてそれを踏襲した結果ではなく、出典の文体に応じて『今昔』撰者がその文体に馴染む表現（同じ文体範疇に属する表現）を選択した結果であると見ることができるように思われる。すなわち、出典が漢文や変体漢文の場合には、その文体に馴染む表現として漢文訓読語である「病ヲ受ク」が選択され、出典が和文の場合には、その文体に馴染む表現として和文語である「病付ク」が選択されていると考えられるのである。

その場合、出典の表現をそのまま取り入れずに、敢えて「病ヲ受ク」や「病付ク」に改めていることについては、出典に存する表現が、『今昔』撰者にとっては〝理解語〟に留まるものであって、未だ〝使用語〟とはなり得ていなかったことに起因しているのではないかと憶測される。[19]

以上のことから推察すれば、『今昔物語集』におけるいわゆる「出典に左右される文体」とは、必ずしも出典より取り入れられた表現の集積によって形成されたものではなく、むしろ、出典の文体に応じて表現を使い分けるという『今昔』撰者の積極的な文体構築の営為によって生み出されたものと考えることができるのではないだろうか。

右の解釈の適否については、今後の詳細な討究に俟つところが多いけれども、少なくとも、いわゆる「出典に左右される文体」が『今昔』撰者の文体構築の営為と密接に関わっているであろうことは、今回の考察によって示唆し得たかと思う。

## 六、おわりに

以上、本稿では、『今昔物語集』における巻別分布に著しい偏りの見られる「病ヲ受ク」「病付ク」という〝発病〟を表す類義の動詞句を取り上げ、その分布の偏りの意味するところを明らかにすべく考察を行なった。その結果、『今昔』撰者の文体の性格を考える上での新たな問題点が浮かび上がってきたかと思われる。

ただし、今回は、いわゆる「出典に左右される文体」との関わりから『今昔』撰者の文体の性格について考えようとしたに過ぎず、『今昔』撰者が独自に有している文体の内実が如何様であるかという点[20]を追求するまでには至っていない。

今後は、今回の考察結果を踏まえた上で、右の問題についても追求してみたいと考えている。

なお、本稿で扱ったこの動詞句という単位については、これまで、文体を測る指標として取り上げられることは少なかったように思われるが、[21]今回の考察によって、その有効性を幾分なりとも示唆し得たものと思う。例えば、動詞句の場合、漢文訓読語であるか否かの認定は、出現頻度（現象面）からだけではなく、その動詞句の元となった字面が漢文に認められるか否か（原理面）によっても行なうことが可能であって、その意味で、語の場合に勝る利点もある。

従来、言語の位相と言えば、主として語のレベルが問題にされてきたように思われるが、今回指摘したような句のレベルでの位相差が認められる表現としては、例えば、

「心ヲ至ス」[22]（前半一六五例、後半一例）

㊻其ノ後、驚キ悔テ、衣鉢ヲ弃テ、大般若経ヲ書寫シ奉テ、心ヲ至シテ供養ス。（『今昔物語集』巻第七、第五）

㊼時に諸の苾芻及諸の大衆、咸ク皆心を至し、掌を合セ恭み敬ひ、頂をモチテ舎利を礼して未曾有なりと歎す。（西大寺本『金光明最勝王経』平安初期点、巻十、捨身品第廿六）

「命終ル」[23]（前半六八例、後半一例）

㊽聖人、年来ヲ経ルニ、命終ル時ニ臨テ、身ニ病无クシテ法花経ヲ誦シテ死ニケリ。（『今昔物語集』巻第十三、第六）

㊾身懐レ命終（ヤブラ）（ハ）（り）ては、諸の惡趣（に）まで墮（ち）しめム。（東大寺図書館蔵『地蔵十輪経』元慶七年点、善業道品第六之二、95）

「涙ヲ流ス」[24]（前半一六二例、後半七例）

㊿目連、羅睺羅ヲ将去ル時ニ、耶輸陁羅、羅睺羅ガ手ヲ取テ涙ヲ流ス事、雨ノ如シ。（『今昔物語集』巻第一、第十七）

61其の臣王の所に詣（り）て、涙を流して王に白（し）て言（は）く「二の子は今現に存（す）レども、憂の火に逼（め）所（る）

ルことを被レリ。(略)」(西大寺本『金光明最勝王経』平安初期点、巻十、捨身品第廿六)

「願ヲ発ス」(前半六二例、後半〇例)

⑫爰ニ吉祥、草ヲ菩薩ニ授ケ奉テ願ヲ發シテ云ク、「菩薩、道ヲ成給ハム時先ツ我ヲ度シ給ヘ」ト。(『今昔物語集』巻第一、第六)

⑬曾(テ)〔於〕布礫迦山ノ観自在菩薩像ノ所ニシテ願ヲ發(オコ)シテ王ト爲(ラムトセシトキ)、(興福寺本『大慈恩寺三蔵(反)法師伝』永久四年点、巻第三、402)

「力不及ズ」(前半三四例、後半六例)

⑭而ル間、此ノ女子、一月餘、更ニ不飲食ズシテ遂ニ死ヌ。父母悲ミ難(マヽ)ク云モ、力不及ズ。(『今昔物語集』巻第九、第廿一)

⑮一切(の)聲聞(と)及(ひ)辟支佛(と)は此の經の中(に)於(て)力及(は)不(る)所なり。(龍光院蔵『妙法蓮華経』平安後期点、巻第二、譬喩品第三、⑲16)

など、漢文の訓読に由来すると推定される動詞句を少なからず指摘することができるのである。したがって、今後は、語のレベルからのみならず、句のレベルからも文体を分析することが可能となってくるものと期待されよう。本稿では、その一つの試みとして、動詞句という単位を利用して『今昔物語集』の文体分析を実践してみた次第である。

## 注

(1) ○池田(現大坪)併治「禁止表現法史」(『国語国文』第6巻10号、昭11・10)○山田巌「今昔物語集に於ける和漢両文脈の混在について」(『国語と国文学』第18巻10号、昭16・10)○堀田要治「『如シ』と『様ナリ』とから見た今昔物語集の文章」(『国語と国文学』第18巻10号、昭16・10)○峰岸明「今昔物語集に於ける変体漢文の影響について―『間』の用法をめぐって―」『国語学』第36集、昭34・3)○桜井光昭『今昔物語集の語法の研究』(昭41、明治書院)○松尾拾『今昔物語集の文体の研究』(昭42、明治書院)○佐藤武義『今昔物語集の語彙と語法』(昭59、明治書院)等。

(2) ○山口佳紀「今昔物語集の文体基調について―『由(ヨシ)』の用法を通して―」(『国語学』第67集、昭41・12)○遠藤好英「今昔物語集の文章の性格と史的位置―会話の引用の〜様形式の考察を中心に―」(『訓点語と訓点資料』第40輯、昭44・6)○橋本(現山口)仲美「今昔物語集の文体に関する一考察―『事无限シ(コトカギリナ)』をめぐって―」(『国語学』第79集、昭44・12)○舩城俊太郎「今昔物語集の三つの文章要素―『其レニ』をめぐって―」(『国語国文』第55巻3号、昭61・3)等。

(3) 注(2)の橋本(現山口)仲美文献に始まる。

(4) 本稿で言うところの〝発病〟を直接的に表現していると見られるものは、他に、「病ニ成ル」(前半三例・後半二例)・「病発ル」(前半〇例・後半二例、上記の用例数は〝世間に病気が発生する〟意を表すものを除いた数である)・「病ヲ得」(前半一例・後半〇例)が存するが、これらは、いずれも用例数が極めて少なく、『今昔物語集』の文体の性格を考える上で必ずしも有効ではないと判断されるため、対象外とする。

なお、「病発ル」については、次掲の用例等により、〝持病が再発する〟の如き意味を担っていると考えられ、〝突発的に

病気にかかる〃という意味を担っていると考えられる「病ヲ受ク」とは、その意味内容を異にしていると見られる。

㊻而ル間、其ノ母重キ病ヲ受テ日来煩ヒケレ二人ノ子皆副テ、西ノ京ノ家ニ有テ療ケル母少シ病減氣有ヒケレ弟ノ僧、三条京極ノ邊ニ、師ノ有ケル所ヘトテ行リ。（改行）而ル間、其ノ母ノ病尚發テ可死ク思ヒケレ（『今昔物語集』巻第二十七、第卅三）

（5）このような考え方は、山本真吾「漢字の用法から観た平安時代の表白文の文体」（『国文学攷』第118号、昭63・6）に説かれるところの「平安時代語の文体論」に従っている。

（6）峰岸明「今昔物語集の文体について」（『国文学解釈と教材の研究』第3巻11号、昭33・11）による。

（7）○高橋貢「古本説話集と関係説話集について―世継物語、宇治拾遺物語、今昔物語を中心として―」（『平安朝文学研究』第3号、昭33・10）○野口博久「宇治拾遺物語の成立について―散佚宇治大納言物語の今昔物語集との関係―」（『言語と文芸』第26号、昭38・1）等。

（8）「請」字が「ウク」という動詞を表記し得る漢字であったことは、次掲の古辞書の記述等より明らかであろう。

㊼請 清井メ（反）コフ ウク 子カフ 求請・告・吾・ス・ム ウケ下ハル ナル又一清（ヲ） 禾者ウ（観智院本『類聚名義抄』法上、五九ノ三）

㊽受 殖酉反（ウク）尚一 請禀（26字略）諾 奴各反（己上受也）東一（黒川本『色葉字類抄』中・五一ウ二・辞字）

（9）最近、藤井俊博「今昔物語集の翻訳語について」（『国語語彙史の研究』十一、平成2、和泉書院）において、「今昔物語集の独自語彙が『法華験記』の語彙と多く対応する」との指摘がなされている。このことと、『今昔』撰者自身の表現と見られる「病ヲ受ク」が比較的多く『法華験記』に認められるという事実とを合わせ考えれば、『今昔物語集』における「病ヲ受ク」の事例は、『法華験記』による影響として捉えることも可能かと思われる。ただし、また別の解釈としては、『今昔』撰者の文体と『法華験記』の文体とがその基盤を同じくすることに基づく結果と考える余地もあろう。

（10）本文は、以下のものを用いた。

○上坂信男『九本対照』竹取翁物語語彙索引（本文編）』（昭55、笠間書院）○小久保崇明・山田瑩徹『土左日記本文及び語彙索引』（昭56、笠間書院）○曽田文雄『「平中物語」研究と索引』（昭60、溪水社）○小久保崇明『多武峯少将物語本文及び総索引』（昭47、笠間書院）○佐伯梅友・伊牟田経久『改訂新版』かげろふ日記総索引（本文篇）』（昭56、風間書房）○田中重太郎『校本枕冊子』（昭28～49、古典文庫）○池田亀鑑『源氏物語大成（校異篇）』（昭28～29、中央公論社）○東節夫・塚原鉄雄・前田欣吾『和泉式部日記総索引（本文篇）』（昭34、武蔵野書院）○岩波文庫642『紫式部日記』（昭5、岩波書店）○東節夫・塚原鉄雄・前田欣吾『更級日記総索引（本文篇）』（昭31、武蔵野書院）○小久保崇明『篁物語校本及び総索引』（昭45、笠間書院）○今小路覚瑞・三谷幸子『校本讃岐典侍日記』（昭42、初音書房）○秋葉安太郎『大鏡の研究（本文篇）』（昭36、桜楓社出版）○鈴木弘道『とりかへばや物語の研究（校注編）』（昭48、笠間書院）○岩波日本古典文学大系（伊勢物語・大和物語・宇津保物

語・落窪物語・夜の寝覚・浜松中納言物語・狭衣物語・栄花物語・堤中納言物語）。

（11）本文は、以下のものを用いた。
○大日本古記録（貞信公記・九暦・小右記・御堂関白記・後二条師通記・殿暦）○増補史料大成（権記・帥記・左経記・水左記・永昌記・春記・長秋記・中右記）。

（12）○春日政治『西大寺本金光明最勝王経古点の国語学的研究』（昭44、勉誠社）○中田祝夫『古点本の国語学的研究（訳文篇）』（昭29、勉誠社）○中田祝夫『正倉院本地蔵十輪経巻五・七元慶点』（昭55、勉誠社）○小林芳規『角筆文献の国語学的研究（影印資料篇）』（昭62、汲古書院）○小林芳規「西大寺本不空羂索神呪心経寛徳点の研究―釈文と索引―」（『国語学』第33集、昭33・6）○大坪併治『訓点資料の研究』（昭43、風間書房）○兜木正亨・中田祝夫『無量義経古点』（昭54、勉誠社）○高山寺資料叢書『高山寺古訓点資料第三』（昭61、東京大学出版会）○山崎誠「文選巻二（宮内庁書陵部蔵「管見記」紙背）影印・翻刻並に解説」（『鎌倉時代語研究』第七輯、昭59・5）○築島裕『興福寺本大慈恩寺三蔵法師伝古点の国語学的研究（訳文篇）』（昭40、東京大学出版会）○尊経閣叢刊『冥報記』（昭12、前田育徳財団）太田次男・小林芳規『神田本白氏文集の研究』（昭57、勉誠社）○『訓点語と訓点資料』所収本（小川本願経四分律・知恩院蔵大唐三蔵玄奘法師表啓・正倉院聖語蔵弁中辺論・石山寺蔵佛説太子須陀拏経・西大寺蔵護摩蜜記・広島大学蔵八字文殊儀軌）。

（13）本文は、以下のものを用いた。
○重栞宋本『十三経注疏』（芸文印書館印行）＊ただし、用例の引用に当たっては、注疏部分は除いた。○『文選（附考異）』（芸文印書館、中華民国五十六年十月）○平岡武夫・今井清編『白氏文集歌詩索引』（平成元・10）。

（14）本文は、長澤規矩也・阿部隆一編『日本書目大成』第1巻所収影印本による。

（15）本文は、新訂増補国史大系本による。

（16）本文は、田中重太郎『校本枕冊子』（昭28～49、古典文庫）による。

（17）本文は、身延山久遠寺発行・汲古書院製作の影印本による。ただし、ヲコト点は平仮名に改めた。

（18）○築島裕『平安時代の漢文訓読語につきての研究』（昭38、東京大学出版会）第一章第二節「平安時代の言語体系」○峰岸明『平安時代古記録の国語学的研究』（昭61、東京大学出版会）序章第二節1「日本漢文について」。

（19）今回の調査で漢文（訓読文）に見出された〝発病〟を表す動詞句「ヤマヒヲウク（受病）」「ヤマヒニアフ（遭病）」「ヤマヒヲウ（得病）」「ヤマヒニカカル（嬰病）」のうち、「ヤマヒヲウク（受病）」については、表⑤に見る如く、和化漢文にも少なからず見出すことができたのであるが、それ以外のものについては、今回の調査では、和化漢文にほとんど見出すことができなかった。漢文訓読文が〈文章理解の場〉であり、和化漢文が〈文章表現の場〉であることを考えると、右の出現状況の差異は、同じ漢文の訓読に由来する動詞句であっても、当時の日本人にとって、既に〝使用語〟であったものと、未だ〝使用語〟とはなり得ず〝理解語〟に留まっていたものとの二種類が存し

ていたことを示しているのではないかと想像される。

(20) この点に関して今回の考察結果からただ一つ知られることは、『今昔』撰者の文体には、少なくとも漢文訓読文体の要素と和文体の要素との両方が認められることである。このことは、『今昔』撰者の文体の内実を考える上で、極めて示唆的な事実であろうと思われる。

(21) 動詞句における名詞と動詞の結び付き方と文章ジャンルや文体との関係について論じた先学としては、次などがある。○佐藤武義「万葉語『霜降』に関する一考察」(『国語学研究』19、昭54・12) ○小林澄子「古代における『涙』をめぐる動詞について」(『文芸研究(日本文芸研)』第106集、昭60・5)。

(22) 築島裕『平安時代の漢文訓読語につきての研究』(昭38、東京大学出版会) 九三頁に指摘がある。

(23) 小久保崇明「『今昔物語集』の語法『只今、命終リナム』考―『命終ルヲハ』の発生と、その位相について」(『日大文理学部(三島)研究年報』第28集、昭55)。

(24) 注(21)の小林澄子文献。

〔付記〕

本稿は、平成三年第六十五回訓点語学会(十月十八日・金沢市文化ホール)における口頭発表を基にまとめたものである。発表の席上、田中牧郎・舩城俊太郎・遠藤好英の各先生方より、発表後、山口佳紀先生より、貴重な御意見・御教示を賜った。各先生方に深謝申し上げるとともに、御教示を十分生かせなかったことをお詫び申し上げる次第である。また、成稿に際しては、小林芳規先生より懇切な御指導を賜った。記して心より御礼申し上げる。

(本学大学院博士課程後期在学中)